

一八八五年八月九日(日)

ドツキネーシヨル  
南神寺ドツキネーシヨルにおいて、ラカール、校長、マヒマーチャランたちと共に

ドゥイジャ、ドゥイジャの父親とタクール、聖ラーマクリシユナ

——母への借り、父への借り

聖ラーマクリシユナドツキネーシヨルは南神寺のあの馴染みの部屋で、ラカールや校長たちと坐っておられる。時間は午後三時から四時の間。

タクールの喉のどの病気がはじまっていた。それにもかかわらずタクールは一日中、信者たちがどうすれば良くなるかと、そのことばかりを思つていらつしやる。彼等が世間に縛られないように——。智慧と信仰が得られるように——。神をさとることができるようにと——。

十日ほど前——七月二十八日の火曜日に、タクールはカルカッタのナンダ・ボース氏の邸に神々の絵を見に行かれて、その際、バララームはじめ他の信者たちの家々を訪問された。

ラカールさんはプリンダーヴァンから戻ってから数日間自宅にいたが、ちかごろは、ラトウ、ハリシユ、およびラームラルたちといっしょにタクールのところで暮らしている。

シヨリー・シヨリー・マ  
大聖母（ホーリー・マザー）はタクールのお世話のために数ヶ月前に田舎から出てこられて音楽塔ナハバトに住んでいらつしやる。例の悲嘆にくれたバラモン婦人（ゴラーブ・マー）が来て、大聖母のところに数日間滞在している。

タクールのそばには、ドウイジャとドウイジャの父親と兄弟たち、および校長が坐っている。今日は一八八五年八月九日。

ドウイジャは十六歳くらいのはずだ。彼の母が他界した後、父親は再婚した。ドウイジャはしばしば校長に伴われてタクールの許もとに来ていたが、そのことを父親は不愉快に思っていたのである。この父親は前々から、タクールを訪問したいと言っていたので、今日やって来たのである。彼はカルカタにある貿易商社の支配人で、ヒンドゥー大学のD・L・リチャードソンのもとで学び、法律試験をパスしている。

聖ラーマクリシュナ（ドウイジャの父に向かつて）——あなたさんの息子がここに来るからって、何のご心配もありませんよ。

わたしはこう言うんですよ。靈性に目覚めてから世間に出て暮らすようにと——。苦勞して黄金を手に入れたら、それを土の中に埋めてしまっておくもよし、箱の中にしまっても、水の中にしまっておいてもいい。黄金は減りも腐りもしない。

それから、無執着になつて世間で暮らせると言っているんだよ。手に油を塗つてからカンタル（ジャックフルーツ）の実を割れと。そうすれば手がベトつかないからね。

未熟な心を世間に放り出せば、心は泥まみれになってしまふからね。智識を身につけてから世間の生活をしなけりやね。

水に牛乳を入れると、牛乳は水に混ざってしまふ。だが、バターにしておけば、水に入れてもまじってしまわずに、そのまま浮いている」

ドワイジャの父「はあ、おっしゃる通りですね」

聖ラーマクリシュナ「ハハハ……。あなたさんが息子たちを叱りなさる気持ちは、よくわかつていますよ。あなたさんは脅かしていなさるんだ。学僧ブラフマチャリがへびに言ったように、『お前は何てバカなんだろう！ 人を咬むことは禁じたが、唸り声を出すのは禁じなかつたぞ！ 唸り声をたてて脅かさずれば、敵はお前を殴りはしなかつたろうに——』とね。あなたさんが息子たちを叱りなさるのは、ただ唸り声をたてていなさるだけだ」

ドワイジャの父親は笑っている。

聖ラーマクリシュナ「いい息子ができるのは、父親に徳のあるしるしです。池を掘って、そこにいい水がたんと溜まったとしたら、それは池の持ち主に徳のあるしるしですよ。

息子のことをアートマジャ(自分の生まれ更り)と言います。あなたとあなたの息子とは別のものじゃないんだ。あなたの一つの形として息子が生まれたんですよ。一つの形として、あなたは俗世間に浸りきって商社の仕事をし、いろいろ楽しんだり苦しんだりしている。もう一つ別な形として、あなたが神の信者になっているんだよ——あなたの息子の形だね。聞くところによるとあなたは、大へ

ん俗っぽいそうだが、そりゃ大ちがいだ！ ハハハ……。あんたさんは何もかもご存じだ。でもきつと、あんたさんは用心深いんだね。それで、わたしの言うことにフーン（はい、はい）と返事していなさるんだ」

ドワイジャの父親は微笑した。

聖ラーマクリシュナ「息子たちがここに来れば、自分のお父さんのほんとうの姿がよくわかるようになるだろう。父親とは何て偉大なものだろう！ お父さんやお母さんをだまして宗教に何か求めたとしたら、ロクなものとはつかめんよ！」

〔以前の話——プリンダーヴァンでタクルが母親のことを思ったこと〕

「人間はいろんな借りをもつて生まれてきている。父親に対する借り、神々に対する借り、悟った人に対する借り。それから母親に対する借りもある。妻にも借りがあつて——養つてやらにやならん。貞節な妻であれば、自分の死んだ後にも困らないように準備しておかなくちゃならない。」

わたしはね、母親のためにプリンダーヴァンに住めなかつた。母親が南神村ドブクネンシヨルのカーリー寺にいなさることを思い出したら、プリンダーヴァンにいても気が落ち着かなくなつた。

わたしは、この息子たちにも言うんですよ。世間のこともして、至聖かみさまのことも忘れるな、とね。世間を捨てろ。なんて言わないよ。——これもしろ、あれもしろ。と言っているんだ」

父親「私は申すのです——勉強が大事だと。あなた様のところに来るのを禁止しているわけではな

いのです。ただ、仲間同志でくだらぬおしゃべりをして時間をムダにするな、と言っておるのです」  
 聖ラーマクリシユナ「この子(ドウイジャ)はきつと、前世から何か特別なものを持ってきているよ。  
 そうでなけりゃ、こっちの二人の兄弟たちとどうしてこう違うんだ? どうしてこの子だけ、こんな  
 ふうなんだ?

あんたさんは、無理矢理この子がここに来るのを止めなさるおつもりかい? みんな、それぞれで  
 (前生からの因縁で)こうなつてきているんだよ」

父親「はい。おっしゃる通りかも知れませんが」

タクールは床において、ドウイジャの父親のそばに来てゴザの上にお坐りになった。話をしながら、  
 父親の体にとまどき触つておられる。

夕暮れ近くなつた。タクールは校長に、「ドウイジャのお父さんと兄弟を、神殿参詣に連れていっ  
 ておあげ——。わたしも、体の具合がよければいっしょに行くんだが……」

そして、「兄弟たちにサンデシユ(ミルク菓子)を少しあげなさい」とおっしゃつた。ドウイジャの父  
 上に向かつて、「少し食べるように言つて下さい。ここでは、甘いものを口にしていただかなければ  
 ならないんですよ」とおっしゃる。(訳註——ベンガル地方では、初めて来た人や、喜ばしいことがあつた人、し  
 ばらく会えない人には、甘いお菓子を口にしてみらう、甘い口のの習慣がある)

ドウイジャのお父さんは神殿を一通り参詣してから庭園を散歩している。タクール、聖ラーマクリ  
 シユナは自室の南東にあるベランダで、ブーペン、ドウイジャ、校長たちと楽しそうに会話をしてお

られる。わざとふざけたようにブルーペンと校長の背中を叩いたりなさった。ドゥイジャに向かつては、笑いながらこうおっしゃる——「どうだい、お前のお父さんとうまく話をしたろう」

日がとつぷり暮れてから、ドゥイジャの父親は再びタクルの部屋に來た。そして、すぐ帰ろうとした。彼が大そう暑がっているようなので、タクルはご自分で彼を扇いでいらつしやる。

やがて、父親は帰っていった。——タクルは立ち上がって見送られた。

**タクルの率直な話——聖ラーマクリシュナは完成した魂か、それとも神の化身か**

アヴァターラ

夜の八時になった。タクルはマヒマーチャランと話をしていらつしやる。部屋にはラカール、校長、マヒマーチャラン、および彼の友人が、一人、二人いる。マヒマーチャランは今夜、寺に泊まつていくつもりだ。

聖ラーマクリシュナ「さて、ケダルの境地をどう見るね？ 牛乳を見たか、それとも飲んだか、どっちだろう？」

マヒマーチャラン「はあ、いろいろと楽しそうにやつておられます」

聖ラーマクリシュナ「ニティヤゴパールは？」

マヒマーチャラン「たいしたものですよ！——いい境地です」

聖ラーマクリシュナ「そうかい。ギリシュ・ゴーシュはどうだろうね？」

マヒマーチャラン「いい境地になりました。でも彼は、我々とは別の世界の人です」

聖ラーマクリシュナ「ナレンドラは？」

マヒマーチャラン「私は十五年ばかり前、あれと同じような境地でございました」

聖ラーマクリシュナ「若いナレンは？ とても素直な子だろう」

マヒマーチャラン「ほんとに、実に素直な青年です」

聖ラーマクリシュナ「お前の言う通りだ。——（何か考えながら）それから誰だったか……。

ここに来る青年たちは二つのことさえ理解ればそれでいい。そうすれば、もうさほど修行をせんでもいい。第一に、このわたしは誰か。——それから、自分たちは何者か。この二つだ。あの青年たちは、ほとんどがごく内輪の兄弟だ。

この内輪の兄弟は、（今生では）解脱はしないだろうよ。（わたしも）もう一度、北西の方角に肉体をとるだろう。

あの青年たちに会って、わたしの魂は安まった。子供をこさえていたり、訴訟ごとをして歩いたり、女と金にはかりかかずらっている連中に会ったって喜べるわけがないだろう？ 清浄な魂に会わないで、わたしがどうしてこの世に住んでいられるものか！」

マヒマーチャランは經典の章句を引用してきかせた。また、ブーチャリー、ケーチャリー、シャーンバヴィーなどのタントラの様々な行法（ムンドラ）について説明した。

〔タクルの五種の三昧——六チャクラの通過——ヨーガの原理（カプトヴァ）——クンダリーニー〕

聖ラーマクリシュナ「そう、そう、わたしの魂は三昧に入つて、大空マハーカーンヤ（純粹意識）を鳥のように翔かつている、と誰かが言ったね。

いつか、リシケシのサードウがここに来た。その人が、『三昧には五種類あるが、あんたはその全部を経験している』と言つたよ。蟻のような動き（靈気の上がる状態）、魚のような動き、猿のような動き、鳥のような動き、蛇のような動き——この五つだ。

マヘトヴァエュー  
靈気が上がるとき、蟻がジリジリと這はい上がるような感じのときもあるし、ある三昧状態のときは、法悦の海の中で真我アトマンの魚がスイスイと気持ちよく泳たぐぎ戯たむれている感じだ！

時には横に寝ているとき、靈気マヘトヴァエューが猿のようにわたしを押し下して楽しく遊びまわっている。そんなとき、わたしは黙もくっているんだ。するとその靈気は、猿みたいにヒョイとサハスラーラに跳はび上がるんだよ！ わたしがギクツツとして跳はび上がることがあるのは、そんなときなんだ。

それから鳥のように——こちらの枝からあちらの枝へ、あちらの枝からこちらの枝へと——靈気が飛び移るんだよ！ それが止まったところは火が燃えるような感じになる。そして、ムーラダーラからスワディスターナ、スワディスターナから心臓へというようにして、だんだんと頭まで上がってくる。

あるときは、その靈気は蛇のような感じで上がっていく——くねりながらね！ 蛇へびみたいに這はつて、しまいに頭までいくと三昧サマデーに入る」



〔以前の話し——22、23才の頃はじめて神狂状態になったこと(一八五八年)——六チャクラの通過〕

「クンダリニーが起きないと靈性は表れない。

ムーラダーラにクンダリニーは眠っている。靈性が目覚めると、その御方はスシムナーの管を通じて、スワディスターナ、マニブーラと上り、さいごに頭の頂上にとどく。これを靈氣の通過うごきと言つて、さいごに三昧に入るんだよ。

ただ本を読んだだけじゃ靈性は目覚めないよ。あの御方を呼ばなければだめ——。一生懸命に心の底から求めればクンダリニーは起きて下さる。話を聞いたり本を読んだりしただけの知識なんて！——そんなことで悟れるものかい！

わたしがいまのような境涯になる直前に、クンダリニーが目覚めて次々と蓮の花をひらかせて終いに三昧に入る様子を、あの御方から啓み示せしていただいた。これはほんとに秘密の話だよ。どんなことを見たかというとね——わたしとそっくりな十二、三の少年こどもがスシムナーの管のなかに入つて、舌をつかつて性器の形をした蓮と交接しているんだよ！ 最初に肛門とリンガとへそ——。四弁、六弁、十弁の蓮が、みんなうつむいていたのが上を向いたよ！

心臓に来て——今でもハッキリ思い出せるが——舌で交ま接わしたら、うつむいていた十二弁の蓮が上を向いて——パツと開いた！ それから、喉の十六弁の蓮、額の二弁の蓮。さいごに頂の千弁の蓮がひらいた！ それを境として、わたしは今の境涯になったんだよ」

以前の話——タクルの素直な話

——聖ラーマクリシユナは完成した人間か、それとも神アツタターラの化身か？

神との対話——マヤーを見たこと——来る前から信者たちを見ていたこと——ケーシヤブ・セ  
ンの法悦（前三昧）状態を見たこと——完全円満のサッチダーナンダを見たこととナレントラ、  
そしてケダル——最初の恍惚状態の時に身体が光り輝いていた——お父さんの夢——ナングタと  
三日間の三昧に達したこと——十四年にもわたるマトウールの奉仕（一八五六〜七一）——クテイ  
の屋上で信者を求めて祈ったこと——絶え間ない三昧——いろいろな霊的修行

タクルは話しながら下においてこられて、マヒマーチャランの近くの床の上にお坐りになった。  
そばには校長ほか、二、三の信者がいる。ラカールも部屋のなかにいる。

聖ラーマクリシユナ（マヒマーに）あなたには前から話したいと思っていたんだが、できなかつ  
た。——今日、話したいね。

わたしのような境地に、あなたは修行しさえすれば誰でもなれると言ったが、それはちがうよ。こ  
こ（わたしの中）には特別な何かがあるんだ」

校長、ラカールはじめ信者たちはびつくりして、タクルが何をおっしゃるのかと固唾かたずをのんで聞  
いていた。

聖ラーマクリシユナ「話をしたんだよ！ 見ただけじゃなく、話をしたんだよ。パニヤン樹の下に

立っていたら見たんだよ——あの御方がガンジス河の中から上がってきて……。それからどんなに笑ったことか！ ふざけてわたしの指をパチンと鳴らしたりしてね。そして話を、話をしたんだよ！ 三日のあいだ、わたしは泣きつづけていた。ヴェーダ、プラーナ、タントラと言ったお経や聖典に書いてある通りのことを、(あの方は)全部見せて下すった！

マハーマヤーのマヤーとはどういうものか、ある日、見せて下すった。部屋のかなのかすかな輝きがだんだんと広がっていった、とうとう全世界を包みこんでしまった。

それから、こんな光景が見えた。——大きな大きな湖があつて、一面、浮き草におおわれている！ 風が吹いて浮き草が少し動くとき自然に水が見えてくる。だが見ているうちに四方から浮き草がよせてきてまた覆いつくす。その水がサッチダーナンダで、浮き草がマヤーだとわかつた。マヤーのためにサッチダーナンダが見えない。が時折、一瞬の間見ることがある。そして又、すぐマヤーに覆われてしまう。

どんな人(信者)がここへ来るか、来るに先だつて見せて下さる。バニヤン樹の下からバクルの樹の下まで、チャイタニヤ様チャイタニヤが先導するキールタンキールタンの一群が見えた。そのなかにバララームバララームがいた。あれがいなかったら、誰が氷砂糖氷砂糖や何かいろんなものを貢いでくれる？ この人(校長)も見たよ！

〔聖ラーマクリシュナ、ケーシャブ・センとその会員にハリ(神)の名とマーの名を教えたこと〕

「ケーシャブ・センに会う前に、わたしはケーシャブ・センにちゃんと会つたんだよ！ 三昧状態の

ときにケーシヤブ・センと彼の会の人たちに会った。部屋いっぱいの人がわたしの前に坐っていた。ケーシヤブは、尾っぽの羽を広げて坐っているクジヤクのように見えたよ！ 広げた羽が、つまり、彼の会の会員たちというわけだ。ケーシヤブの頭には赤い宝玉が光っていた。あれはラジャス性のしるしだ。ケーシヤブが弟子たちにこう言っている——『君たちみんな、このかたのおっしやることをよく聞きなさい』わたしは大実母に言った——『マー、あの人たちはイギリス式の考え方をしている連中だ。——どうしてあの連中に話してやらなけりやいけないんだらう』すると、マーは説明して下すった。『カリユガ(末世)には、こんなふうになるものよ』って。

ケーシヤブとその一党(いっとう)は、ここ(タクール)からハリの名とマーの名を持っていった。だからマーは、あの会からヴィジヤイを取り上げた。(訳註)でも彼は、アーデイ・ブラフマ協会には入らなかつたよ。

(自分を指しながら)——この中に、何かがいるんだよ。ゴパール・センという少年がよくここへ来たが——ずーっと前のことだがね。この中にいなさるお方が、ゴパールの胸に足をのつけた。すると、その子は恍惚として話し出した。『あなたはまだ、だいたい待たなきゃならないようです。私は、俗っ

(訳註) ヴィジヤイはチャイタニヤの主な従者、アドヴァイタ・ゴースワミーを祖先に持つ家系なので、一時的に形ある神の崇拜を否定することがあったとしても、やがて本来の道——ヴィシシュヌ派の道を歩むことになるので、ハリとマーの名を称えるようになったケーシヤブから引き離して、独立してヴィシシュヌ派(ハリ)の道を歩むようにマーが仕向けたようである。一八八三年十一月二十六日の『コタムリト』には、ガヤーで修行をした後タクールに会いにやって来た赤い僧衣(ゾル)を着たヴィジヤイの姿を見て喜ぶタクールの様子が記述されている。

「はい人たちといっしょに暮らすことはできません」と。そのあとで、『帰ります』と言って家に戻った。しばらくして、彼が死んだという知らせを受けた。あの子がきつと、ニティヤゴパールとなって生まれてきたんだよ。

不思議なものもずいぶん見たよ。完全円満のサツチダーナンダを見た。そのなかに、垣根を境にして二つのものが見えた。片方はケダル、チュニー、ほかに大勢の形ある神を信ずる信者たち。垣根の向こう側は血のような赤さの煉瓦粉の山のような感じで、光り輝いている。その真ん中にナレンドラが坐って三昧に入っている！ 瞑想にふけっている彼を見て、『おー、ナレンドラ！』と言ったら、ちよつと目をあけてこつちを見た。彼が別の形で、シムラ地区のカーヤスタ(高位のカースト)の子として生まれていることがわかった。——そこで、大実母に言ったものだ。『マー、あれをマーヤーに縛っておくれ。さもないと、三昧になって体を捨ててしまうから——』と。ケダルは形ある神の信者だが、のぞいて見ていたが、身震いして逃げていった。

だから、思うんだよ。この(自分の)なかに大実母ママ自身が住んでいて、信者たちとリーラーをさされていなさるんだ、とね。はじめてこんなふうになったとき、光で体が燃えていたものだ。胸だつて真っ赤になつていたよ！ それで、マー(ママ)にお願いしたんだ。『マー、外に出ないでくれ。内なかに入つて、内なかに入つて！』というわけで、今、わたしの身体からだはこんなに貧弱ひんじやくなのさ。

もしあのまま、わたしの体が光り輝いていようものなら、有象無象うざうむざうが大勢寄りたかつてきて、さぞうるさいことだつたらうよ。今は何も外に表れていない。おかげで、雑草(つまらぬ人間)が寄りつか

ぬ——純粹な信仰者だけがここに集まっている。どうしてこの病気になったかわかるかい？——これの意味もそれなんだ。——欲のある信仰をもった連中は、この病気を見たら逃げていくからだよ。

望みがあつてね——マーにお願ひした。『マー、わたしは信仰者たちの王様になりたい！』

それから、こうも思った——『心の底から神を求める人は、きつとここに来る！ 必ずここに来る！』と。ごらん、その通りになっている。そういう人たちだけが、みんなここに来ている！

わたしの中に誰がいなさるか、お父さんは知っていたんだよ！ お父さんはガヤーで夢を見なすつてね——ラグヴィルが、『わたしは、お前の息子として生まれる』とおっしゃつた。

この中にはあの御方がいなさる。女と金の完全な放棄！ これがわたしの使命だ！ 夢のなかでだつて女と楽しんだことなぞないよ！

ナングタがヴェーダーンタを教えてくれた。三日間も三昧に入っていた。マーダヴィーの樹の下で三昧に入っているわたしを見て、彼はびっくり仰天して叫んだよ——『こりゃ何としたことだ！』つて。

あとになって彼は、わたしの中に誰がいることを理解した。そして、『わたしは必要がないようだから、行かせてもらうよ』と言つた。その言葉を聞くと、わたしは半三昧状態になつてしまつた。そうして

(訳註2)大実母の神性がタクールに現れるようになると、大実母の神聖さ、偉大さがタクールの外観にも現れてきて、肌の色さえ黄金色に輝いていた。タクールの行く先々では、その神々しい姿に魅了された人々の注目の的となつていた。そこでタクールは外面的な美しさを隠すように、マーに外に出ないで内に入るようお願いしたのである。

こう言った——『わたしが』ヴェーダーンタの真理を覚<sup>さと</sup>るまでは、あなたは行くことなんか出来ませんよ』ってね。

その当時は、朝から晩まで彼といっしょにいた。そして、ヴェーダーンタのことばかり話していた。ブラフマニ<sup>ブラフマニ</sup>女性行者(ヨーゲーシユワリー)がよくこう言ったものだよ。『ババ、ヴェーダーンタを聞いてはいけませんよ。信仰が薄れますよ』って。

わたしはマーにお願いした——『マー、この体を養ったり、サードウや信者たちに囲まれて暮らすにはどうすればいいんだい? ——一人、金持ちをよこしておくれ!』そしたら、シエジヨさんが十四年間も世話してくれた!

わたしの中にいる御方が、前もって知らせて下すつたよ——どんな種類の信者が来るかってことを。ガウランガ(チャイタニヤ)の姿が目の前に現れるとすぐわかる——ガウランガの信者たちがここに来るんだ、とね。もしシャクテイの信者が来る場合はシャクテイの姿——カーリーの姿が見える。

客堂の屋根に上がって、献灯<sup>アールテイ</sup>の時間にわたしは声をかぎりに呼ばつたものさ。『オーイ、お前たちは誰だア、何処<sup>どこ</sup>にいるウー。早くここへ来ーい!』ごらん、今はみんな次々と集まってきている!

この体のなかにあの御方がいなすつて——自分の意志で信者たちを相手に仕事をしていらつしやる。

何人かの信者の境地は、ほんとに大したものだよ! 若いナレンは、クムバカが自然にできるんだ! それから三昧も——時によると二時間半も! もっと続くときもあるんだ! 何てすごいんだろう!

(訳註、クムバカー——ラージャ・ヨーガでいう呼吸法の一過程、呼吸抑止)

あらゆる種類の修行を、ここ(自分)はしてきた。——智慧のヨーガ、信仰のヨーガ、行為のヨーガ、ハタ・ヨーガまでも——寿命を延ばすために！ とにかく、この中に誰か一人いるんだ。そうでなければ、どうして三昧から下りてきて信仰と信者をもって暮らしていくことができただろう。コアール・シンがよく言っていたつけ——『私は今まで、三昧状態から戻ってきた人を見たことがない。——あなた、ナーナクその人だ』(訳註、ナーナク——[1569～1588]シーク教の開祖)

(「以前のこと——ケーシャブ、プラタプ、クックたちと共に汽船に乗る(一八八一年)」)

「どこもかしこも俗物ばかりだ。どこもかしこも女と金ばかりだ。——それなのにわたしは、こんな境地にいるんだよ！——三昧と法悦のなかに浸っている。だから、プラタプ(プラフマ協会のプラタプ・チャンドラ・マジュンタール)とイギリス人のクックが来て、汽船の上でわたしの様子(三昧状態)を見たとき、『ババ！ 幽霊にとりつかれているようです！』なんて言われたんだよ」

ラカールも校長も驚嘆の思いで、タクール、聖ラーマクリシュナが自ら語られるこの驚くべき言葉を、一言もささず聞いていた。

マヒマーチャランにはタクールの暗示されたことがわかったのだろうか？ このお話をすべて聞いた後でも、こんなことを言うのだった。——「それでございますか。あなた様の前生の行いがご立派だったために、今生でそのような経験をなすったのでしょうか」彼にとっては、タクールは単なる一人のサー



ドウか信仰者なのだ。タクールは彼の言葉に相槌を打つてこうおっしゃった。「そう、過去の行いの結果だ！ 旦那さま(神)にはたくさんお屋敷があつて——ここもその応接間の一つなんだよ。信仰者はあの御方の応接間だ」

マヒマーチャランのブラフマチャクラ——以前の話——トーター・プリーの教え

〔夢で姿を見ることはくだらないことか？——ナレンドラを見た神の姿〕

夜は九時になった。タクールは小寝台に坐つておられる。マヒマーチャランは希望していた——ちょうど部屋にタクールがいらつしやるからブラフマチャクラを行おうと。彼は、ラカール、校長、キシヨリーほか、二、三の信者たちをさそつて床の上に輪になった。そして、皆に瞑想するようにと頼んだ。一同は瞑想をはじめた。ラカールが前三昧状態になった。タクールは寝台から下りてこられて、ラカールの胸に手を当てる。マールの名をとえはじめられた。それでラカールは、意識をとりもどした。(訳註、ブラフマチャクラ——数人が輪になって行うタントラで定められた秘密の行法)

夜が更けて、もう午前一時近いだろう。今日は黒分十四日目である。あたりは真つ暗闇だ。信者の一人、二人が、ガンガールの堤防をそぞろ歩いている。タクール、聖ラーマクリシュナはお起きになつて外に出られ、そこにいた信者におっしゃった。——「ナンクタ(トーター・プリー)がよく言ったものさ、こういう時刻——こんな真夜中に、アナハタの音が聞こえてくる、と」(訳註、アナハタの音——宇宙最初の音、振動)

夜も明け方近く、マヒマーチャランと校長はタクールの部屋の床で眠っている。ラカールはキャン  
プ・コット（折りたたみ式の簡易ベッド）の上で眠っている。  
タクールは五つかそこらの子供のように真っ裸になって、時々部屋のなかを歩き回っていらつしや  
る。